

主体的・対話的に学ぶ生徒の育成

－話す活動から書く活動へ繋げる－

1 テーマ設定の理由

昨年度の実践研究テーマは「主体的な学びの生まれる授業づくり」であった。「学びたい」「知りたい」という意欲を引き出すためには、導入でいかに生徒を引きつけることができるのかが大切だと思い、1年目は特に導入に力を入れてきた。導入ではチャット（2人1組で、あるお題について英語で対話をする活動）を取り入れることが多かったが、生徒が自分自身のことを英語で表現できるようなトピックを選んできた。自分自身のことなので表現しやすく、積極的に活動に参加する生徒が多かった。

今年度は「主体的」に「対話的」を加えて、さらに研究を深めていきたい。話す活動に関しては自分なりに工夫することが多くなったが、書く活動に関しては主体的に活動させることが難しいと感じている。そのため、どのような手立てをとると「主体的」で「対話的」な書く活動を展開することができるのかについて、研究していきたい。

2 実践内容 I

(1) はじめに

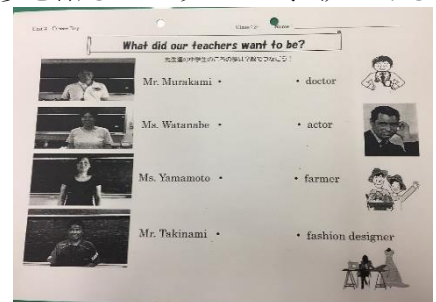
中学2年、単元はUnit3 Career Dayを扱った。本単元はレストランでの職場体験に関する注意の読み取りから、体験の感想についての対話、新聞社での体験レポートの読み取りなどが扱われる教材である。本校でも、職場体験を5月末に3日間実施しているため、生徒にとって身近な話題である。体験後の生徒は、慣れない環境のため疲れた様子であったが、体験から得たものはたくさんあるようで、体験したような職種に将来就きたいと話す生徒もいる。この体験を通して、漠然とした夢から将来の職業について具体的に考え始めた生徒や、新しい夢を持つことができた生徒もいると思う。全員が将来の夢を持っているとは限らないが、今回の授業では、将来の夢について話し、4文程度の英で書いたりすることを目標とした。また、言語材料としては、不定詞が扱われており、生徒たちは自分や周りのことについて表現の幅が飛躍的に広がるようになることを考える。

(2) 主体的な学びを生むために

(I) ねらい

中学2年生という発達段階を考えると、自分自身の将来の夢を語るということに抵抗がある生徒もいるだろう。そのため、生徒をいかにトピックに引きつけることができるかが大切だと思い、導入を工夫した。生徒は普段、教員の昔の夢を知る機会も少ないので、強い関心を持ち意欲的に取り組むと考え、学年教員の中学生のころの将来の夢をクイズ形式で紹介した。また、学年教員の夢を予想し、それを伝えるために必然的に不定詞(wanted to be)を使わなければならないので、意欲的に英語を使おうとした。このように、生徒が知らない情報を提供することで「知りたい」という感情を持たせることができ、授業の活性化に繋がると考える。

さらに、生徒にとっては「今」のことよりも「昔」のことが比較的話しやすいと考えられるため、本時では「今」の夢について話す前に、「昔」の夢について話す時間を設けた。モデル文として、教員自身の昔の夢であるセーラームーンを示すことによって、話しやすい雰囲気を作ることができ、楽しく主体的に伝えることができると考えた。



(II) 実践から

上記のねらいを実践してみて、導入は効果的であったと思う。点と点を線で結ばせて、教員の昔の夢を予想させた。生徒はかなり意欲的に取り組み、自然な流れで **want to be** を導入することができたように思う。学年教員に、なりたかった職業と理由を英語で言ってもらい、それを動画に撮って見せた。生徒は身近な先生のことなので真剣に聞いている様子で、「何を言ってるんやろう?」というように、「知りたい」という姿勢が見られ主体的に英語を理解しようとしていた。



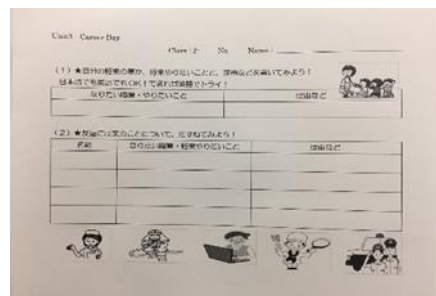
また、将来の夢について話す前に、子供のころの夢についてのチャットを入れたことも、雰囲気作りとしては効果的であった。生徒同士の会話を聞いていると、おもしろい夢を言った生徒に対して、ペアの生徒が興味を示し“Why?”と主体的に会話を広げようとしている場面も見られた。このように、必然的に質問が出るような対話や、「知りたい」と思わせる雰囲気作りが導入としては大切だと思った。

改善点としては、学年教員の昔の夢を予想させた際に、予想を伝え合う活動をするとうよかったということであった。おそらく、自分の予想を伝えなかったり、友達の予想が気になったりした生徒もいたはずである。I think Mr. Murakami wanted to be a doctor. のように例文を示すことで、ターゲットである **want to be** も使うことができる。将来の夢という難しいトピックではあるが、生徒を引きつけることができていたので、英語を話すという活動を入れることができると、動機付けの面と英語的な面での導入ができ、よりよい授業になったのではないかと思った。

(3) 対話的な学びを生むために

(I) ねらい

本時の目標のひとつに、将来の夢について4文程度の英文で書くことができるというものがあった。その目標を達成するための支援として、ペアワークを取り入れた。英語はコミュニケーションを図るための手段なので、ペアワークでは生徒同士が英語で対話を行う。普段の授業からペアワークを積極的に取り入れており、生徒も比較的慣れてきたと感じるため、本時のペアワークでは、メモを書く活動を新たに加えたい。自分の将来の夢と理由を簡単にメモし、モデル対話を参考にしながらペアワークをする。友達の将来の夢と理由もメモしなければならないので、生徒は相手が話す英語を聞こうとする。ペアの将来の夢や理由を理解することで、その後の書く活動の際に参考になる内容を増やすことができる。



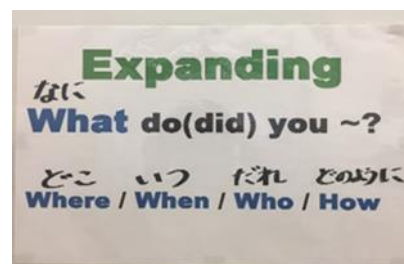
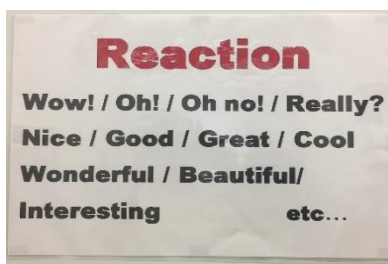
<対話例> A: What do you want to be?

B: I want to be a ...

A: Why?

(II) 実践から

指導案検討の時点で、書く活動の前のペアワークについて何度も考え直した。ペアでの対話が本時の目標達成のための手立てになるため、生徒がいかにペアに対して質問を返すことができるのかが鍵



になると考えた。普段の授業では、リアクションワード(Really?など)で反応したり、質問を返すことができるように、5W1Hを意識させたりしている。簡単な質問(Do you?)ができ

るようになった生徒も増えてきた。しかし本時は将来の夢がトピックなので、会話を広げるための質問を思いつくのが難しいと思い、メモを用意した。そのメモを頼りに、What や Why を使って対話しようとしていた生徒もいたが、やはり生徒にとって難しか



ったと感じたこれらのことを踏まえ、ペアワークに入る前に、質問を膨らませることができるような支援を取り入れるべきだった。たとえば、どのような質問ができるか予想させたり、対話を広げるためにマインドマップを書いたりするなど、具体的な質問の例を示すことが必要だと思った。そうすることで、さらに内容の濃いペアワークになったのではと思う。

しかし、ペアワーク中の雰囲気を見ると、楽しそうに笑顔で対話をしたり、一生懸命伝えようとジェスチャーを交えたりする姿勢が見られた。中には、英語が苦手な友達に教える生徒や、生徒同士教え合う場面もあり、英語での対話は少なかったけれど、お互いをカバーし合いながら取り組んでいた。

(4) まとめ

今回の授業は、良い点と改善すべき点がはっきりしていた。将来の夢という難しいトピックであったが、導入が効果的であり、生徒はトピックに引きつけられた。そのため、その後の昔の夢を伝え合う活動にもスムーズに入ることができた。

改善点として、書く活動の際にもう少し手立てをするべきであった。生徒の英作文を見ると、2文目まで書いていた生徒がほとんどであった(例 I want to be a game creator. I like games.)。これは書く活動の前のペアワークで表現しているからであり、その点で判断すると、ペアワークは有効であった。しかし、本時の目標は将来の夢について4文程度の英文で書くことであったので、目標達成のための手立てとしては有効ではなかった。4文程度の英文にするために、代表生徒の英作文をクラスで共有し、4文にするためにはどうしたらよいか全員で考えたり、教師が生徒とインタラクションしながら4文書くために参考になる内容を引き出してあげたりすることができると考えた。また、導入で昔の夢について話しているので、昔の夢について2文程度、将来の夢について2文程度というように目標を見直すことも有効だという意見もあった。

3 実践内容Ⅱ

(1) はじめに

実践内容Ⅰの授業から、話す活動を通して自分の意見を深め、その後書く活動に繋げるという授業展開の難しさを知った。そのため、学年や教材は違うものの、実践内容Ⅰの反省を踏まえ、第3学年で対話的な書く活動の実践を再び行った。

この学級は比較的英語が得意な生徒が多く、話す活動も意欲的に取り組むことができる。また、高校受験前でもあるので、ほぼ全員が授業に積極的に参加する。今回の実践では、Unit5 Living with Robotsの単元を扱い、まとめ活動として、「ロボットとの暮らしに対して賛成か反対か」の意見文を5文書くことを目標とした。本校では10月から3年生全員が英作文用のノートを1冊作り、1日1題を目標に取り組んでいる。そのため意見文を書くことへの苦手意識はそれほどないと感じているが、ただ「書く」のではなく、「対話的な学びを通して意見を書く」ということをめあてとした授業を展開したい。

(2) 主体的な学びを生むために

(I) ねらい

学力診断テストも終わり、日々難しいトピックの英作文に取り組んでいる生徒が多いが、「ロボットとの暮らし」というトピックに主体的に向き合うことは、やはり難しいと考える。そこで、より身近にロボットを感じてもらうために、接客や掃除をロボットのみで行うホテル(変なホテル)や、人と話すことができるロボットの動画を見せ、ロボットとの暮らしについて考えさせたい。

(II) 実践から

生徒はロボットについての動画を、興味を持って見ていた。ロボットが接客をするホテルについて、“Do you want to stay at Hen-na Hotel?”と聞くと、多くの生徒が Yes と答える中、No と答えた生徒もいた。意見を聞くと、“It sounds so quiet. I am a little scared.”などとロボットへの反対意見が出てきた。自然な流れでロボットというトピックに引きつけることができたと思う。

(3) 対話的な学びを生むために

(I) ねらい

実践内容 I であったように、話す活動を通して友達のを考えを知り自分の意見を深め、書く活動につなげるという流れをうまく展開することができなかった。そこで今回は今回はチャットではなく、マインドマップを用いて意見交換を英語で行い、書く活動につなげる。

(II) 実践から

上記(2)で述べたように、生徒はロボットの動画を通して、ロボットへの賛成意見や反対意見を持つことができたようであった。そのため、マインドマップで自分の意見を書かせたところ、たくさん書く生徒が多かった。英語を苦手とする生徒には、教科書本文からヒントを得るよう指示したところ、いくつかマインドマップに書き込むことができた。その後3人グループで意見交換をさせた。

<対話例> A: I think robots are so efficient that they are taking people's jobs away.
B: I think so, too. I was surprised to watch "Hen-na Hotel".
C: But robots can help many people.

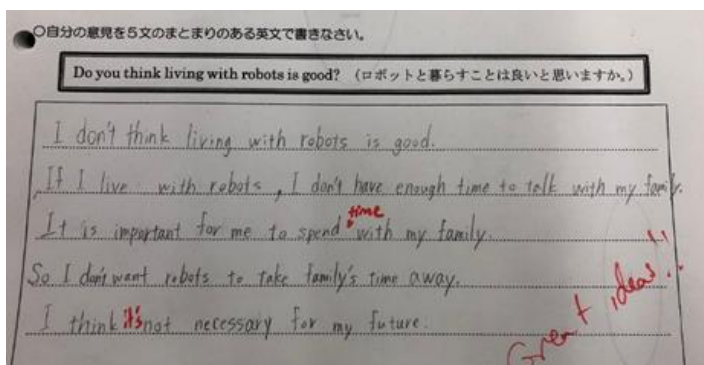
その後、クラス全体で意見を求めると、全員が1つは発表することができた。ALTが板書しながら、生徒の様子に合わせて質問をする場面も見られ、比較的対話が多い活動になったと思う。中には斬新で新しい視点の意見が出ると、自分のワークシートに書き込んだりする生徒や、反応したりする生徒も見られ、協働的な学びが生まれていると感じることができた。



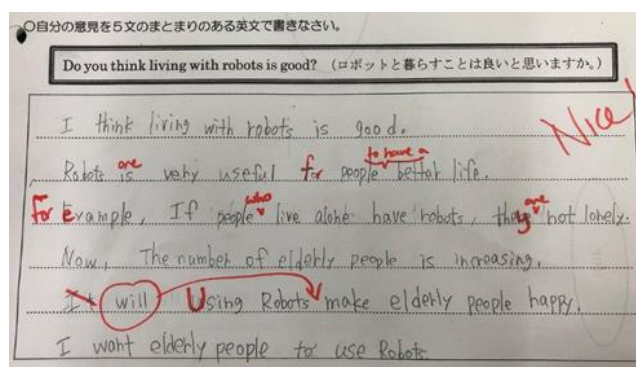
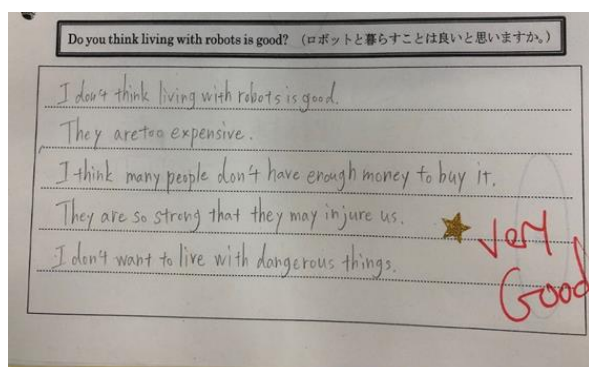
(4) まとめ

今回の授業では、「対話的な学びを通して意見を書く」ということを目標にした。「対話的」と一言と言っても様々な方法があると思った。もちろんチャットのように英語での会話もあれば、マインドマップを用いて意見交換しながら新しい視点を増やしていくのも対話的ではないかと思う。今回、マインドマップを用いた結果、レベルの高い英作文を書く生徒がたくさんいた。

また、ロボットというトピックをいかに生徒に身近に感じさせることができるかということも大切だと思った。生徒がロボットとの生活をイメージすることで、より具体的なアイデアを出すこと



ができる。改めて、単に英作文を書かせるのではなく、いかにそのトピックに生徒を引きつける
が必要である。



4 まとめ

今後は、生徒が主体的に学ぶことができるトピックを増やし、意欲的に学ぶための手立てを考え続けたい。さらに、英語は勉強するものではなく使うものなので、英語を使う必然的な場面を設定し、実際場で使えるような英語を教えたい。また、実践内容 I では書く活動でつまずきが見られたが、トピックに関係なく、自分の考えを表現することは簡単ではない。そのため、生徒の苦手意識を少しでもなくすために、書く活動の際にはスモールステップを踏むなどの支援を心がけようと思う。また、ただ単に「書く」のではなく、対話的に「書く」活動を行いたい。そのために、トピックについて何らかの話す活動を入れる。今回行ったマインドマップを用いた活動は、対話的な「書く」活動を展開するのに効果的だったと感じている。しかし、実践内容 I でもあったように、チャットを行う場合には、メモなどを用意したり相手にスムーズに質問できるような手立てを取り入れたりすることが必要だと考える。マインドマップをうまく「書く」活動に活用できたとは思いますが、チャットから「書く」活動に繋げる場合に関してはまだ改善が必要だと思う。今後は授業参観にさらに積極的に参加したり、同僚や指導教官の授業からヒントを得たりしながら、より効果的に話す活動から書く活動に繋げるための方法を考えていきたい。